

#### 第四節 協調會戰時戦後の対策

##### 第一項 戦時の対策

産報の分離によつて協調會は研究調査機關に還元した。しかし戦局の進展に~~従~~て、~~事業の遂行は日甚~~困難を加えていつた。

その一は、役職員の故障である。田澤常務は、昭和十九年春四國に病臥したまゝ、同秋退任後死亡し、後任の安井氏は在任短く、余は翌年五月空襲警報下に就任した。同月末水野會長は罹災して大磯に休退、余は同時に罹災したか、その他も職員の被害も甚だ多く、協調會事務所は罹災者の假泊所となつた。松岡副會長は二宮に籍居の形となり、多數職員も通勤の事實困難を増していつた。

その上に塩澤社會政策學院長及び本會の塚本參與理事は、とくに病死せり、東京高等工學院長も缺員となつたのがある。

その二は、協調會建造物の故障である。

協調會館は堅牢建物として海軍の部分品貯藏所として微用され、事務所は空襲をうけて受附室に落下した焼夷弾は取出したか、倉庫は焼失し、貴重を什器と用紙とを全焼した。更に東京高等工學院は數回の焼夷弾を受けたか、職員生徒の取調により辛うじて被害を最少数に喰ひ止めたのである。

その三は、調査研究發表機關の故障である。その最も打撃をうけたものは、印刷中の社會政策時報の全焼で、